

朗読教本 「わらしべ長者」

むかし、むかし、ある所に正直者ですが、運の悪い男が住んでいました。

朝から晩まで、働けど働けど、貧乏でいいことがありませんでした。

ある日、男は、最後の手段として、飲まず食わずで、観音さまにお祈りしました。

すると、夕方暗くなった時、観音さんが目の前に現われ、こう言いました。

「あなたは、このお寺を出るとき、転がって何かをつかみま

す。それを持って西に行きなさい。」

確かに、男は、お寺を出ようとしたとき、転がって、何かをつかみました。

それは、一本のわらでした。何の役にもたたないと思いましたが、男は、わらを持って西に歩いて行きました。

歩いていると、あぶが飛んできたので、男はあぶをつかまえると、わらの先に縛りつけ、また歩いて行きました。

しばらく歩くと、向こうから牛車（ぎっしゃ）がやってきて、牛車に乗った子どもが、男のもっているアブを見てお母さんに言いました。

「ねえ、あのアブがほしいよ」

男は、子どもにアブのついたワラをあげたところ、子どもの母親はお礼にミカンを三つくれました。

ミカンを三つ持ち、男はさらに西に歩いて行きました。しばらく行くと、娘さんが道端で苦しんでいるのを目にしました。

「もう、のどがかわいて一歩も歩けない。どこかに水はないかい。」

そういって、水を欲しがっていたので、男はミカンをあげたところ、じきに、娘さんはよくなりました。

お札に、男は、きれいな絹の布をもらいました。

絹の布を持って、男はさらに西に歩いて行きました。

しばらく行くと、サムライと元気のない馬に出会いました。

「困った。急に馬がたおれてしまった。急いでいるのにどうしよう。」

そして、美しい布を見て、サムライは、男に馬と持っている絹の布を交換してほしいと言いました。

男は、布と馬を交換してあげました。男が、夜通し馬の面倒を見てやると、馬は、朝には元気になっていました。

馬を連れて、男はさらに西に歩いて行くと、そこで、引越している家がありました。

すると、門の中から、りっぱなおさむらい様が出てきました。

「これこれ、その男。私はこれから東の国へ行かねばならない。その馬をゆずってくれぬか。荷物を運ぶ馬がたりないのじゃ。その代わりに、私が帰ってくるまで、この家とうらにある田畑をお前にあずけよう。」

男は馬と家と交換しました。この家のもちぬしは、とうとう帰ってきませんでした。

そうして男は立派な家と広い畑を持ったお金持ちになりました。

観音さまに言われたとおり、男はわら一本で長者になり、男は、生涯、わら一本粗末にすることはありませんでした。村人からは、「わらしべ長者」と呼ばれました。